

# 須臾も 行きて見てしか

# 神名火の 淵は浅さびて

# 瀬にかなるらむ 大伴旅人(巻六・九六九)

この歌は、731(天平3)年に大伴旅人が奈良の家で故郷を思っ  
て詠んだと『万葉集』  
の題詞にあります。

大伴旅人は、665  
(天智天皇4)年に大  
伴安麻呂の長男として  
生まれ、中納言などの  
要職を歴任しました。  
728(神龜5)年ご  
ろには、九州を統括す  
る大宰府の長官である  
大宰帥として、現地へ

赴任しています。大宰  
府における旅人につい  
ては、令和改元の出典  
として話題になった  
「梅花の宴」などで詠  
んだ多くの歌が『万葉  
集』に収められること  
から、その動向が知ら  
れます。旅人はその後、  
大納言への昇進に伴っ  
て730(天平2)年  
末に大宰府を去って平  
城京に戻り、一年もた  
たない731(天平3)

やまと  
万葉がたり

年7月に67歳で亡くな  
りました。よって、こ  
の歌は最晩年に詠まれ  
た歌となります。

旅人が生まれた頃の  
都は飛鳥後岡本宮で、  
旅人の父母もその近隣  
に居住していたとみら  
れるため、生まれ故郷  
は飛鳥でした。歌中の  
「神名火」は神が宿る  
聖なる山のことです。『万  
葉集』には飛鳥の神名  
火を詠んだ歌が多数収

められています。

飛鳥の神名火が現  
在のどの山なのかは  
諸説ありますが、飛鳥  
宮跡の南にあるミハ  
山に当たるとする説  
が最有力視されていま  
す。このミハ山の東に  
は山麓をめぐるとい  
うに飛鳥川が流れ、川に  
沿って稲渚という地  
名が現在も残っていま  
す。この辺りは、古代  
には南淵と呼ばれ、飛  
鳥川の淵に臨む地と  
して知られていまし  
た。そのことから、「神  
名火の淵」は、この付  
近を流れる飛鳥川が深  
くよどんで淵となっ  
ている場所を指すと考  
えられます。

【訳】ほんの少しの間でも行つて見たいものだ。あの神  
名火の深い淵も浅くなり、瀬となつてきているのだろうか。

(県立万葉文化館主任  
研究員・竹内亮)

「飛鳥川の淵瀬」を  
詠んだ歌は他にも多  
く、後に歌の定型句と  
なっています。旅  
人が晩年に故郷を懐か  
しんで詠んだこの歌  
は、彼が幼少期に見慣  
れた光景を歌ったもの  
でしょう。稲渚の辺り  
から見たミハ山は円錐  
形の整った山容をして  
おり、その聖なる山の  
姿は故郷の象徴だった  
のではないでしょう  
か。

# 朝風あさなみに 来寄きよる白波しろなみ 見みまく欲ほり

## われはすれども 風かぜこそ寄よせね

作者未詳(巻七・一三九一)

この歌は『万葉集』巻第七に警諭歌(人の行為や感情を物に譬えた歌)として収められた歌の一つで、海や波を詠み込んだ歌六首のうち最後に当たります。白波は作者の恋人、風や風は世間の噂を譬えており、「朝風のように人の噂が立っていない今こそ、あなたに来て欲しい」と思っているのに、噂の風が吹いていないので、あなたは私の所へ寄ってこない」と、恋人に会えないことを嘆く歌です。『万葉集』の中でもそれほど有名ではなく、取り上げられる機会も少なかった歌ですが、意外な形で世に知られるようになりました。

2003年、奈良文化財研究所(奈文研)は明日香の石神遺跡で発掘調査を行いました

やまと  
万葉がたり

石神遺跡は飛鳥時代後期(7世紀後半)に役所などの公的施設が置かれていたと考えられる遺跡で、発掘調査では大量の木簡が出土しました。その中から、次のような文字が刻まれた木簡が見つかりました。

「留之良奈弥々麻久阿佐奈伎尔伎也」  
当時、奈文研に勤めていた私は、同僚の研

究員と共にこの木簡の「しらなみまく」とな解読に挑みました。縦書きの文は右の行から読むという常識にとらわれ、「るしらな……」と読み始めたのですが、全く意味が分かりませんでした。ところが、今回の歌と木簡の字がある研究者が、左行句を比べると、「来寄から右行へ続けると「る」が「きやる」と書「あさなみにきやる」かれるなどの違いがある」と書(奈良万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

【訳】朝の風の時に寄せて来る白波を見たいと思っているのに、風が波を寄せて来ないのだ。

り、木簡には下の句がないので、厳密に言うとう両者が同一の歌かどうかは不明です。しかし、「々」を後から追記していること、刃物などを用いて木に彫り込んだ文字であることからみて、お手本となる歌を見ながら文字の練習をした木簡であると考えられています。そのお手本が今回の歌であった可能性は十分にあると言えます。